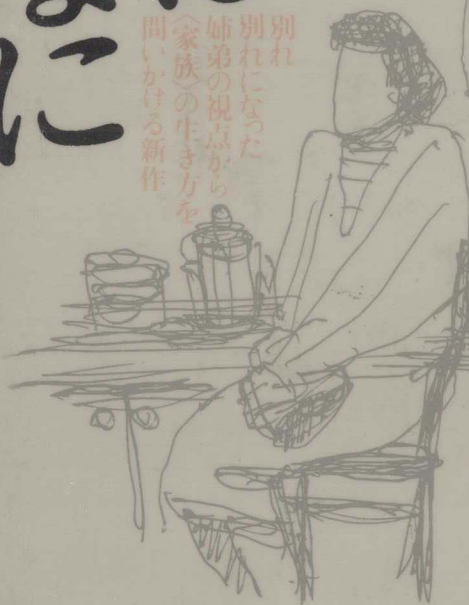


時には いっしょに

別れ
別れになった
姉弟の視点から
〈家族〉の生き方を
問うける新作

結婚するって
なんだよ
うちがうちに
いて行くか
決めるって
わかってるんだよ



yamada taichi



山田太一

作品集

11



時には いっしょに

山田太一

作品集

11



大和書房

山田太一作品集—11

時にはいっしょに

1986年12月15日 第一刷発行

著者——山田太一

発行者——大和岩雄

発行所——大和書房

東京都文京区関口1-33-4 〒112

電話番号(203)4511

振替 東京6-64227

印刷所——暁印刷

製本所——ナショナル製本

装幀——菊地信義

装画——田中靖夫

©1986 Taichi Yamada Printed in Japan

ISBN4-479-55011-9

落丁本・乱丁本はお取替します

目次・

1 夏の思い出・

2 姉と弟・

3 別離・

4 新しい秋・

5 淋しいくせに・

6 できごと・

7 ゆつくり来た涙・

8 落ちそうな果実・

9 散り散りのころ・

10 海へ行った日・

11 四人でランチ・

あとがき・

277

夏の思い出

●吉祥寺駅（昼）

学校はまだ夏休みである。
電車が出て行く。別のホームに電車が入って来る。

●駅前

雑踏。肩掛けのついたゼッケンをつけた高校一年生山下秀夫が慌てて人を選ぶように目を走らせ、高校生らしい女の子三人連れの前に立ちほだかり、

山下「失礼します。天道高校一年、落語研究会の山下です」

ゼッケンには『天道高校・落語研究会』と書いてある。

●同じ駅前

大塚晃治が同じゼッケンをつけ、中年のおばさんの前に立って、

大塚「落語研究会の大塚です」

●同じ駅前

奥村秀樹が、同じくゼッケンをつけ、三十代の主婦二人の前で、

奥村「一分です。小咄をひとつ聞いて下さい。えー、昔はバカな人がいたもので、屏風の立てかたを知らないで、まっすぐに立てたもんだから（と早口でいう）」

●同じ駅前

田川茂、誰に声をかけようか、激しく迷いながら、雑踏を横切って行く。で、思わず、先輩六人が立って怖い顔をして見ている前に来てしまい、

茂「あ、いま（と忽ちあとずさる）」

中尾「（三年生。怖い）なにしてる、田川」

茂「走っている」いま、すぐ（と雑踏を行き）あ、すみません（と手あたり次第のおばさんに声をかけるが、よけるようにいかれてしまう）」

山下「（女子高生らしい三人に）ありがとうございました」大塚「（中年の女に）お邪魔しました。ありがとうございました」

●同じ駅前

茂「仲間が終って行くので更に慌ててやや雑踏からはな

れて、人でも待つのかうつむいて壁を背に立っている女の
の前へ行き）失礼します。天道高校一年、落語研究会の
田川です」

増川比呂子「（うつむいている）」

茂「（かまわず）夏の特別訓練で、一年生は、駅前で、女
の人に小咄することになっていきます。一分です。よろ
しく、願います（お辞儀をしながらチラと中尾の方
を見ると）」

中尾たち、ゆっくり茂の方へやって来る。

茂「（慌てて）えー、バカバカしい小咄を二席申上げます。
昔、兩國の橋から身を投げて死ぬ人が沢山いて、これでは
いけないと番人をつけました。するとその夜も、若い
十八ぐらいの女の人がやって来て、身を投げようとした。
番人はいそいでつかまえて、いいました。お前だ
な、しょっちゅう、身を投げて死んでるのは」

中尾たち、はなれて立っている。

比呂子、ただ目を伏せている。

茂「（焦って）すいません。笑って下さい。笑ってくれな
いと、別の人にまたやらなきゃならないんです。お願い
します（ギクンとする）」

比呂子「（顔を上げて）。その目に涙が溢れている」

茂「あ。失礼しました（とベコリと一礼して、逃げるよう
に一方へ）」

比呂子「（涙の目で動かない）」

茂の声「（ややはなれて、もう手当り次第の感じで）すい
ません、失礼します。天道高校・落語研究会の田川で
す」

●並木のある坂道（夕方）

茂、自転車で、ウンウンのぼって来る。

●住宅地の道

平地。茂、自転車をとばす。

●田川家・表

玄関脇にガレージがあるが、いまは車がなく、そこへ
自転車をとめて塾のカバンをはずしている季代、ハッ
と坂道の上を見る。家の前が坂になっている。

季代「いやッ（と大声を出す）」

茂の自転車が、かまわず坂の上から、急スピードでお
りて来る。

季代「やッ」

茂「（自転車と共に、季代の横へとび込んで来て、前の壁
すれすれでブレーキをかける）」

季代「（頭へ来て）しないっていったでしょう。お母さん
（と中へ呼びながら玄関へ）」

茂「うっせエな（と苦笑）」

●田川家・居間

誰もいない。チャイム、ひとつ。

●表

茂「自転車に鍵をかけながら」いるわけないだろう」

季代「どうして？」

茂「お母さんの自転車どこにあんだよ？」

季代「えらそうに（と鍵をカバンから出しにかかる）」

●居間

茂「庭に面したレースのカーテンをあげ、ガラス戸の鍵をはずして、ガラス戸をあける」

●洗面所

季代「（顔を洗っている）」

●居間

茂「ソファのあたりを見て、小さく」なによ、これ（と呆然とする）」

ソファにタオルケットがまるめて落ちかかっている、テーブルには冷しそばを食べた皿と母明子の箸、麦茶の半分ぐらい入った冷蔵庫用の容器、これも麦茶が半分入ったグラス。灰皿に煙草、すいがら四つほど。

茂、ちょっとやりきれないものを見たような気がして、タオルケットをまざとってたたむ。

●洗面所

季代「（タオルを使いながら）茂。顔と手ぐらい洗いなさい」

●居間

茂「自分が使ってなにいつてんだ（と片付けている）」

●廊下

季代「（洗面所から居間へ）使ってなくたって洗わないでしよう」

●居間

茂「（皿の上に灰皿やグラスを重ねて運ぼうとしながら）なんなんだ、これ」

季代「なにしてるの？」

茂「見ろよ、これ」

季代「そんなに、持てっこないでしょう」

茂「だったら、持ってきて来いよ（と台所へ）」

季代「（残ったものを持ちながら）やだ、テーブル、こぼしてる」

●台所

茂「(台所の汚なさにもうんざりして) なんなのよ、汚ったねえなあ(と流しにある鍋、使いっぱなしのまな板に包丁、出しっぱなしの牛乳などの脇へ持って来たものを置く)」

季代「(来て) やだ、くさい」

茂「(勝手口のドアをあけはなしながら) 今頃よくいうよ」
季代「どうしちゃったの? お母さん」

茂「牛乳出しっぱなしで、食ったもんは、ほったらかしで、煙草ブッカブッカすって(と牛乳のバックに鼻近づけて) どうする? くせえ? (と季代につきつける)」

季代「やだ(とのけぞる)」

●表

明子「(自転車にスーパーの買い物をもせて坂をおりて来ながら) あ、ごめんなさい(と明るく家の表にとまっている米屋の軽トラにいう)」

米屋の松本さん「あ、どうも(と丁度荷台から十キロをビニールバックした米をとり出していう)」

明子「(ブレーキをかけ) ああ、間に合った」

●台所

季代「(水を出して洗っていて、止める)」

明子の声「三千九百円よね」

米屋の松本さんの声「はい、毎度」

明子「あらア? 誰か帰ってるの? (とあいている勝手口から顔を出す)」

季代「(微笑で) お帰り」

●居間

茂、電気掃除機を使っている。

●表(夜)

自転車、伸浩が乗る分が加わって四台になっている。

季代の声「(基本的には明るく) よして」

●ダイニング

季代「信じらんない」

四人、食事中。

茂「なにがだよ?」

季代「お父さんの前でいうことないでしょ」

伸浩「いいさ」

茂「そうだよ、別に悪いことしたわけじゃあるまいし」

季代「やよねえ、お母さん」

明子「(苦笑)」

伸浩「誰だって、たまには手を抜きたいさ」

茂「そうさ」

季代「だったら黙ってればいいでしょ」
明子「終り、もう。すいませんでした」

茂「だからア」

伸浩「いいだろ、もう」

季代「ほんと、男のくせに、ねちねちしてるんだから」

●伸浩の書斎の前

茂「(ノックする)」

伸浩の声「はい」

●伸浩の書斎

茂「(ドアをあけ) ちょっといい?」

伸浩「どうした?」

社会言語学の助教授である。整理されているが、相当な本の量である。カードボックスなどもある。その中で、パソコンを使っている伸浩。ドアを閉める茂。

茂「姉さんがねちねちなんていうから途中でやめたけど」

伸浩「うん(ああ、そのことか)」

茂「ほくは別に文句をいいなかったわけじゃなくて」

伸浩「いいさ」

茂「A型で、片付けるの好きで、綺麗にしてるお母さんが、この頃、時々部屋掃除もしなかったりするから、どうか身体悪いんじゃないかって」

伸浩「——」

9——夏の思い出

茂「そういおうと思ったのに」

伸浩「大丈夫だ」

茂「どうして?」

伸浩「——どうしてって」

茂「調べたの?」

伸浩「——」

茂「検査かなんかしたの?」

伸浩「いいじゃないか、つまらないこと気にするな」

茂「つまらないかな?」

伸浩「お母さんは元氣だ。なにもしたくない時は誰にだってある。勉強してるのか?」

茂「してるよ(と出て行こうとする)」

伸浩「一年からやってないと、ロクな大学入れないぞ(とパソコンのキーを叩く)」

●季代の部屋の前

茂「(ドアをノックする)」

季代「なに?」

茂「なんでもねえよ(と階段をおりて行く)」

季代「(ドアをあけ) お母さん、茂は用がないのに、ノックするの」

●階下・居間

茂「(入って来ながら) うるせえ女」

明子「(洋書とノート。辞書をひいている) 茂が悪い」
茂「まいったなあ(ソファにドスン)」

明子「なにいつてるの(自分が悪いくせに)」

茂「今日すごくまいった(とソファにころがる)」

明子「どしたの？」

茂「吉祥寺の駅前でさ、泣いてる女がいたの」

明子「ワーワー？」

茂「赤ん坊じゃあるまいし」

明子「どんな風に？」

茂「ただ目にいっぱい涙浮べてただけだけど、まいったよ」

明子「どうして？」

茂「え？」

明子「あなたが泣かしたの？」

茂「冗談じゃないよ」

明子「じゃ、どうしてまいるの？」

茂「関係ないけど、とにかく落語研究会、やめようと思っ
てさ」

明子「話そらした」

茂「そらさないよ。まいったのは、落語研究会だもの(と

逃げるように階段へ)」

明子「なんなの？ その女の人」

●階段

茂「知らないよ。変な想像しないでよ(と自室のドアを開

け閉めする)」

●居間

明子「——(辞書をひいている)」

●調布駅の周辺(昼)

賑やかである。車と人々。

●予備校のビル・表

「秋期生募集中」などの幕。受験塾ということ分つて
。

●教室

英語の授業がたけなわである。先生、大きい身振りで
熱心に教えている。

それを聞いている季代。なにかノートに書き、斜め後
ろからの視線が気になり、その方を見る。誰が見てい
るか知っているのである。たしなめる気持。

津村康男「(季代ににらまれても少しも悪びれず、ニコリ
と笑い、人差し指を左右に振り、階下を指す)」

季代「(なんのことか分らない)」

津村「(かまわず、オッケオッケと指を輪にしてニコニコ
笑う)」

●予備校の廊下

休み時間。学生たちの移動。

●廊下の端

季代「(来てふりかえり) 授業中に人のこと見ないで」

津村「用があったんだよ(と前に立つ)」

季代「どんな？」

津村「高杉さん、新宿のカフェ・バーでバイトしてらって」

季代「それが？(ドキリとしたのをかくす)」

津村「逢えるじゃない」

季代「別に——」

津村「どうして？」

季代「なんなの？(一体)」

津村「あの卒業して大学行ったから、淋しくてたまらな
いんじゃないかったっけ？」

季代「そんなこといついった？」

津村「分るもん」

季代「勝手に——(と行こうとする)」

津村「じゃいいわけ？ 逢わなくていいわけ？」

季代「人のこと、なによそれ(と行く)」

津村「待ってよ(と腕をつかむ)」

季代「やだ(とふりはらう)」

津村「俺のこと嫌いなのは知ってるよ」

11——夏の思い出

季代「こんなところで(よして)」

津村「俺を利用しろよ。二人でカフェ・バー行けば、自然
じゃない」

季代「どこが自然？」

津村「ずっと逢ってないんじゃないの？」

季代「そんなことしてる暇あるわけないでしょ(と行
く)」

津村「利用しろよ(とそれでも声をおさえてその季代に急
ぎいふ)」

●階段

季代「(じっとしていられず、たかぶりをもち余しかけな
がらおりて行く)」

カフェ・バーの音楽、先行して。

●カフェ・バー(夜)

高杉、ウェイターをしている。

高杉「お待たせいたしました(とある席に罐ビールなどを
置いて行く)」

「いらっしやいませ」とマスターたちの声。

高杉「いらっしやいませ」

入って来る津村。そして、季代。着替えて少しお洒落
をしている。

高杉「(気がつかないようにカウンターの方へ戻って行

く」

ウェイター「こちらへどうぞ」

津村「(うなずいて行く)」

季代「(行く)」

高杉「(カウンターのところで、どうしようかと考えて、二人の方を見る)」

二人、ウェイターのいうなりに腰をかけメニューを渡されていく。

されている。

バーテンの声「はい、三番テーブルさま」

高杉「(あ、と目の前の酒と料理に気がつき) かしこまり

ましたア(と盆に酒や料理をのせはじめる)」

季代「(その高杉を見ている)」

高杉「(三番テーブルへ進んで行く)」

季代「(その高杉を見ている)」

高杉「(お待たせいたしましたア(と酒などを置いていっている)」

季代「(目をそらし、ハッと津村を見る)」

津村「(悲しい目で季代を見ている)」

季代「(メニューを乱暴に裏返したりして見て行く)」

●カフェ・バーの夜(夜)

高杉「(急ぎ出て来て、ちょっと小暗いところへ)」

津村「(続いて出て来て、高杉の前へ行く)」

高杉「なんだ? こんなところへ」

津村「逢いたがってるから(と店の方を指す)」

高杉「(ここにいることどうして知ってるんだ?)」

津村「聞いたから」

高杉「誰に?」

津村「ちよっとルートあって」

高杉「生意気いうな(ハッとする)」

季代「(出て来て、高杉を見る)」

高杉「(津村に) 高校生が来るとこじゃねえよ(といいド

アの方へ)」

季代「(緊張して立っていて、ちょっとあとずさる)」

高杉「(来て) こんなところ来ちゃ駄目じゃないか(と微笑

し) 受験、頑張らんくちや(と中へ)」

季代「(見送り、津村を見る)」

津村「(はなれて季代を見ている)」

季代「(パッと走り去る)」

津村「——(追いかける)」

●京王線下り電車の窓

夜景が走る。

●電車の中

季代「(ドアの傍に立っている)」

津村「(向き合って立っている)」

季代の声「時々、自分の気持が、不思議だわ」
津村の声「俺もそうだな」

●調布駅・自転車置き場

季代「自分の気持が? (歩きながら)」

津村「なにしてるんだろうって思うことあるよ」

季代「なにって?」

津村「俺のこと、絶対好きにならない奴と、なにしてるのかと思うよ」

季代「悪いけど」

津村「いいさ。こっちが勝手にしてるんだ」

季代「私、ほんという和高杉さんなんか嫌いな」

津村「そんなこといわなくていいさ」

季代「でも、そうなの(自転車分らず)ここらなんだけどなあ」

津村「あれじゃない。ほら、それ」

季代「どうして? (と自分より先に見つけたことに驚きながら行く)」

津村「(ちょっと投げやりに) 知らね」

季代「(自転車をはき出しながら) 私はとにかく、ああいうタイプ嫌いな。不良っぽくて自信たっぷり、頭がよくて、笑うと格好いいの知ってて計算して笑ったりして、ムカつくっていいの」

津村「ほんとかなあ(少し嬉しい)」

季代「でも、なんかひかれちゃうの。どうしてか不思議なの」

津村「(壁をたてられた気持)」

季代「多分、うちの父、社会言語学なんてやってて、母も公務員の家だったし、固いって言えば固いから、かえってくずれた人に魅力を感じるのかなって思うの。弟も中学まで全然そんなことなかったのに、私立の高校入ったら、サークルおどろいちゃう、落語研究会に入ったのよ。あ、興味ないね、こんなこと」

津村「そんなことないよ」

季代「どうもありがとう」

津村「うん」

季代「さよなら」

津村「さよなら」

季代「(自転車に乗って行ってしまふ)」
津村「——(立ちつくして見ている)」

●並木のある坂道(昼)

車がのぼって行く。

●住宅地の道

平地。車が行く。

●田川家・表

下り坂を来て、車、脇へ寄って停る。

●車の中

水谷曜子である。

田川家を見ている。

●田川家・階段

明子、とりこんだ洗濯物をかかえておりて来て居間へ。
チャイム。

●居間

洗濯物、じゅうたんの上にほうり出してインターフォ
ンへ。

明子「はい、どちらさまですか？」

●玄関の表

曜子「——」

明子の声「どちらさま？」

曜子「水谷です」

●居間

発作的にインターフォンを切ってしまう。

明子「——」

●玄関の表

曜子「——」

●居間

明子「(小さく) なんなの？ (ひるみや当惑がこみ上げて、
ハッと一方の鏡を見る)」

Tシャツにショートパンツで、髪も無造作である。

その髪を手でなでつけながら鏡の前に行く。こんな格
好で逢いたくない、という思いと、なぜあの女と逢わ
なくちゃいけないのよ、という思いが錯綜して、パツ
と洗濯物へ行き、座って、それをたたみはじめる。ア
イロンをかけるのは、脇にやる。しかし、すぐまた手
を止める。

玄関の方を見る。洗濯物をほうりようにして、立上り、
ツカツカと玄関の方へ。

●玄関の中

明子「(来て) いるのまだ(といってみる。しかし、声は
小さいので、外まで届かない。心を決め、サンダルをつ
っかけ、ドアの鍵をあけ、ドアをあける)」